



前回焼成した時は、多くがオブジェ作品だった。



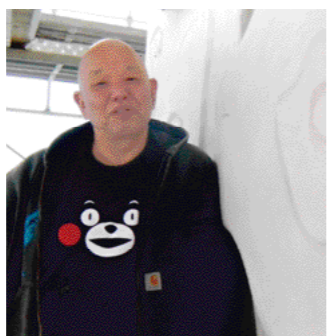
火前、棚板7枚に並べられた抹茶茶碗やぐい呑は、『陶遊』薪窯焼成イベントの参加者たちの作品の一部。



三浦小平二氏の壺2点。火色が美しい……。

雪で、窯詰め中に床に敷いた座布団がびしょびしょになる水分量だったことです。そして5つめは、シートでカバーしておいた薪が、たつぷりと水分を含んでしまっていたのです。

93時間の焼成のうち、最初の30時間はまず水分を蒸発させることと、あまり乾燥していない赤松の割木で、温度をコントロールする



クマさんと篠原勝之氏。クマさんのオブジェは7月8日にお披露目。



クマさんのオブジェと一緒に展示予定の陶板も焼成。

刊1周年記念1000円で薪窯焼成イベント」の参加者たちの作品など、約80点です。

間に9回、京都造形芸術大学のスクーリング授業でオブジェ作品を多数焼成しましたが、火前までびつしりと棚板を組んでの食器焼成には、焼成中の薪による棚崩れを予想すると、なかなか勇気のいる窯詰めとなりました。

それぞれ異なる目的を持ち、満足する焼き上がりを一室の穴窯で求めるのですから大変です。

しかし、この窯詰めですと、棚板7枚が火前になる計算ですので、『陶遊』の参加者は満足されるのではないのでしょうか。

ただ窯内の薪投入スペースは幅80cm、奥1m80cmです。そこへ長さ1mの切端と赤松の大割を投入します。結果的には93時間の焼成となりました。延べ35人の窯焚き人が、なんとか棚を崩さず焼成できたのは、奇跡かもしれません。

4つめのハードルは、今年の豪雪で、窯詰め中に床に敷いた座布団がびしょびしょになる水分量だったことです。

3つめのハードルは、今年の豪雪で、窯詰め中に床に敷いた座布団がびしょびしょになる水分量だったことです。そして5つめは、シートでカバーしておいた薪が、たつぷりと水分を含んでしまっていたのです。

第8回 地下式穴窯焼成、5つのハードル

昨年末、8年前に他界された人間国宝三浦小平二さんの奥様、竹子さんから連絡をいただきました。急死された三浦さんが青磁釉で焼成するつもりだったと思われる壺2点があり、できれば増穂登り窯で焼成してほしいとの依頼でした。生前、焼締作品を焼成させていただいた経験があり、さっそく国立のご自宅でその作品を拝見させていただきました。

青磁釉を予定されていた作品だとすると、素地は佐渡の赤土かもしれません。素焼きされていたので、肌は薄いピンク色でした。奥様に確認したところ、やはり赤土とのことでした。壺2点と水指2点、合計4点をお預かりしました。

三浦さんの作品は、今回の『陶遊』復刊1周年記念企画1000円で薪窯焼成イベント」で予定している「地下式穴窯」で一緒に焼くことにしました。

地下式穴窯は、幅65cm、奥行約3m50cmです。焚き口は正面の一箇所だけなので、手前の焚き口から奥までの焼成中の温度差は50〜100℃になります。この温度を上手く利用しなくてはなりません。三浦さんの作品は、上品ななかに青磁の深い色合いと可愛いレリーフが特徴です。バランスのとれた焼締にするためには、火前の灰被りでは具合が良くありません。壺部分は素焼きの時点で細かいクラックが入っています。炎が



積雪量は積み上げてる薪よりも高く。

続・増穂薪窯通信

てんやわんや

文・写真 増穂登り窯 太田治孝

富士山に、春の訪れを告げる「山」の文字が現れる。